

Title	否定とも肯定とも共起する副詞「とても」について : 否定用法に見られる「条件づけ」を中心に
Author(s)	朴, 秀娟
Citation	阪大日本語研究. 2010, 22, p. 43-63
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/6588">https://hdl.handle.net/11094/6588</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 否定とも肯定とも共起する副詞「とても」について —否定用法に見られる「条件づけ」を中心に—

On the Japanese adverb “totemo”:  
Focusing on the structural properties of its negative usage

朴 秀娟  
PARK Sooyun

キーワード：条件づけ、極性、否定用法、肯定用法、語彙的否定形式、構文的位置

## 要旨

本稿では、述語の極性によって異なる意味・機能を持つ副詞「とても」を対象に、それぞれの用法に見られる構文的特徴について分析を行った。「とても」の否定用法は、不可能を表す文で用いられ、不可能となる理由や状況が提示されるという特徴が見られることを指摘し、それを「条件づけ」と名づけ、その現れ方について記述した。肯定用法の「とても」には、「条件づけ」が必ずしも伴われるわけではなく、述語の直前に位置するという特徴が見られる。否定用法の「とても」の場合には、構文的位置は、述語の直前でなくてもよい。また、「とても」は、不可能や困難を表す語彙的否定形式と共起し否定用法として用いられることがあり、その場合、「条件づけ」の有無と「とても」の構文的位置によって、区別が可能であることを指摘した。さらに、現代日本語に見られる「とても」の肯定用法が発生したとされる明治期からの史的考察も行い、肯定用法が発生する前に見られる、文法的否定形式あるいは語彙的否定形式との共起による否定用法は、「条件づけ」を伴っていることを指摘した。

## 1. はじめに

「とても」は、次の例に見られるように、否定述語とも肯定述語とも共起し、述語の極性によって異なる意味・機能を持つ副詞である。森田（1989）など、従来の研究では、否定述語と共起している例1）の「とても」を、話し手の態度を表す陳述副詞として、肯定述語と共起している例2）の「とても」を、述語で表される状態の程度のはなはだしさを表す程度副詞としている。

- 1) この天気では、とても出かけられない。
- 2) この本はとても面白い。

しかし、「とても」は、例3)のように、語彙的否定形式と共起し、主語と述語のむすびつきは肯定的でありながら、陳述副詞的に用いられることがある。同じ「むずかしい」という述語であっても、程度副詞として用いられている例4)の「とても」と比較されたい。例3)は、陳述副詞として用いられる「とても」の類義形式「とうてい」に言いかえることができ、例4)は、程度副詞として用いられる「非常に」に言いかえることができる。例3)の場合、「非常に」に置きかえると不自然である。

3) この天気では、とても出かけることはむずかしい。

4) この本はとてもむずかしい。

このように、同じく「むずかしい」という述語と共起している「とても」でも、意味・機能において異なるのには、述語の極性だけではなく、他の構文的特徴が作用していることが考えられる。

陳述副詞として用いられる「とても」の否定用法には、程度副詞として用いられる「とても」の肯定用法とは異なる、ある構文的特徴が見られる。例1)や例3)にも見られるように、「とても」の否定用法には、次の例5)のように、不可能となる何らかの理由や状況が提示される。理由や状況が提示されない例5)は不自然な回答になってしまう。一方、「とても」の肯定用法は、例6)のように、理由や状況の提示が必ずしも必要ではない。

5) A:「眠そうですね。」

B:「夕べは熱帯夜で、とても眠れませんでした。」

5) A:「眠そうですね。」

B: ? 「夕べはとても眠れませんでした。」

6) A:「元気ですか?」

B:「とても元気です。」

本稿では、このような、「とても」の否定用法に見られる、不可能となる理由や状況の提示を「条件づけ」と名づけ、陳述副詞として用いられる否定用法の「とても」を中心に、程度副詞として用いられる肯定用法の「とても」と比較しつつ、その構文的特徴を考察していく。

以下、第2節で、「とても」が用いられる構文的特徴に関する先行研究を概観し、第3節で、本稿で用いた調査資料について述べる。続く第4節では、「とても」の用法別に、構文的特徴について考察し、第5節で、明治期からの史的考察を行う。最後に、第6節で本稿の内容をまとめる。

## 2. 先行研究

「とても」が用いられる文の構文的特徴についての研究は、森田（1989）、森下（2001）などのように、共起する述語がどのようなものであるかを中心にしたものが主である。

森田（1989）では、「とても」が共起する述語について、陳述副詞として用いられる場合は、動詞述語の否定形式または否定的概念の語であるとし、程度副詞として用いられる場合は、形容詞述語、および状態性の動詞であると述べている。この見解は、その他の研究においても共通して見られるものである。

森下（2001）では、否定用法の「とても」が共起する述語について、さらに考察を深め、多くが可能表現と共起するということを指摘している。また、「とても」が共起する述語の例として、次のようなものを挙げている。これらの述語形式について、森下（2001）は、典型的な可能表現<sup>1)</sup>とは言えないが、実現が不可能であることを示している点では、可能表現と共通していると説明する。（以下は、森下2001、p.60から抜粋。）

「～であるはずがない」、「～するわけにはいかない」、「～ものではない」、「～どころでは {ない・すまない}」、「～こない」、「～そうにない」、「～気がしない」、「～には及ばない」、「適わない」、「埒が明かない」

従来の研究では、このように、「とても」が共起する述語に関するものが中心となり、その他の構文的特徴について述べているものは、管見の限り見当たらない。本稿では、共起する述語以外に見られる構文的特徴までも視野に入れ、「とても」が用いられる文の構文的特徴について分析を試みる。なお、共起する述語については、先行研究の記述にあらたに付け加えることはない。

## 3. 調査資料について

本研究では、現代日本語を対象にした考察に関しては、基本的に、1950年度以降に刊行された小説52作品（『CD-ROM版 新潮文庫100冊』より46作品、その他から6作品）を対象に用例を収集している<sup>2)</sup>。しかし、より精密な記述が必要だと思われた部分については、1991年から2006年までの『CD-毎日新聞』からも用例を収集している。また、史的考察に用いた用例については、言文一致体のものを対象に、『CD-ROM版 新潮文庫100冊』、『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』、『CD-ROM版 新潮文庫 大正の文豪』、『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』から用例を収集した。

#### 4. 「とても」の用法と「条件づけ」という構文的特徴

本節では、「とても」の用いられる文に見られる構文的特徴を、共起する述語<sup>3)</sup>の極性別に述べていく。

##### 4. 1. 文法的否定形式と共起する場合（否定用法）

「とても」は、次の例のように、文法的否定形式<sup>4)</sup>の述語と共起すると、陳述副詞として働く。この場合の「とても」を否定用法とする<sup>5)</sup>。

- (1) 「こんなことじゃあとてもヒマラヤなんか行けないな」(新田次郎『孤高の人』)
- (2) さて、この日、世界各地に発生した奇怪な、しかし、どこかユーモラスで滑稽な事件をのこらず書きならべていると、とてもこの本一冊には、おさまりきれないと思われる。(井上ひさし『ブンとファン』)

この、否定用法の「とても」が用いられる文には、述語で表される動作や状態の実現が不可能となる理由や状況を提示するという特徴が見られる。これを本稿では「条件づけ」と名づけておくことにする。例(1)では、「こんなことじゃあ」が、例(2)では、「のこらず書きならべている」といったものが、それぞれ、「行けない」、「おさまりきれない」理由や状況として提示されている。

この「条件づけ」となるものは、例(1)、例(2)のように、構文的に明示されていることもあれば、コンテクスト上に示されていることもある。以下、「条件づけ」がどのように現れているかについて、具体的に述べていく。

##### 4. 1. 1. 「条件づけ」が構文的に明示されている場合

「条件づけ」は、基本的に、節や句として同一文中に現れ、実現が不可能となる理由や状況が構文的に示される。また、同一文中ではなく、前文に示されることもある。(共起している述語には実線を、「条件づけ」に該当する部分には波線を施して表す。)

###### ①節として現れているもの

節として現れるものは、例(3)や例(4)のように、理由を表す節であったり、例(5)や例(6)のように、条件を表す節であったりする。

- (3) 「残り飯ならあるけれど、凍っているし、とても食べられるものじゃあないね」(新

田次郎『孤高の人』)

- (4) 犬を連れて散歩できるという催しも、子供らに列をすっかり占領されていて、とても割り込めそうにない。(唯川恵『肩ごしの恋人』)
- (5) 「無理ってことはないだろ。そっちが一万出すというから、こっちもやっつてやろうかという気になったんだ。その金がなければ、とても柳にファイトマネーなんか払い切れないよ」(沢木耕太郎『一瞬の夏』)
- (6) 「マンスリーサーベイ」はB5判横組みの雑誌である。内容はデパートやスーパーの経営分析やそこで販売している商品の売行動向、その市場についての考察、というようなものが中心になっていた。経営分析などというのは非常に難しいし、ある程度企業のバランスシートなどを読みとる能力がなければとてもうちでできなかった。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

## ②句として現れているもの

句として現れるものの場合、多くが、「～では」の形で示される。

- (7) 「ねえ、ねえ、母さん、伯父さんがくれた三百万円じゃ、とても、これ買えないよ」(曾野綾子『太郎物語』)
- (8) 「ボサ粥のほうがまだいい。これではとても夕食まで堪えられそうにない」(北杜夫『楡家の人びと』)
- (9) それから化粧品とか呉服といった商品はその流通経路も複雑でメーカーも沢山乱立しており、生半可な知識ではとても理解できない世界なので、ほくの追いかける商品はよく考えるとデパートやスーパーの経営や営業にはたいして影響を与えない趣味の小物、といったようなものが多かった。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

また、次のような場合、「～では」の形で現れてはいないが、連体修飾を受けている「状態」、「天気」が「条件づけ」として働いている。実際に否定されているのは「登山できる」、「動ける」であって、それぞれ、「この状態では、とても登山できない」、「この天気では、とても動けない」のように、構文的に「～では」を伴った構文にしても意味は変わらない。

- (10) 「あなたは別山乗越をこえて来たでしょう。あそこでさえあれだけの風が吹いている。剣岳の頂上付近では三十メートル以上の風は吹いているでしょう。とても登山できるような状態ではないですよ」(新田次郎『孤高の人』)
- (11) 十二月三十一日は霧で明けた。とても動けるような天気ではなかった。雪がち

らちらしていた。だが、午後になると、霧は霽れて視界が効くようになった。(新田次郎『孤高の人』)

次のように、「条件づけ」が、連体修飾語や連体修飾節に示されることもある。これらの場合、連体修飾によって、不可能となることの一種の条件が表されていると考えることができる。次の例の連体修飾は、「傷痕があれだけあると、とても半分も隠しおおせるものではあるまい」、「加藤の眼が真直に向けられると、とても逃げられない」のように、構文的に、条件を表す節として表すことも可能である。連体修飾のない(12')と(13')は不自然であることから、連体修飾が「条件づけ」として働いていることがわかる。

- (12) いずれもっとよい時代がきたら手術を受けさせることも考えられるが、たとえどんな手術を受けたにせよ、あれだけの傷痕はとても半分も隠しおおせるものではあるまい。(北杜夫『楡家の人びと』)
- (13) 宮村はいいたくないようだったが、真直に向けられた加藤の眼からはとても逃れられないとあきらめたように、「加藤さんの歩いたあとをずっと歩きつづけています」といった。(新田次郎『孤高の人』)

- (12') ? いずれもっとよい時代がきたら手術を受けさせることも考えられるが、たとえどんな手術を受けたにせよ、傷痕はとても半分も隠しおおせるものではあるまい。
- (13') ? 宮村はいいたくないようだったが、眼からはとても逃れられないとあきらめたように、「加藤さんの歩いたあとをずっと歩きつづけています」といった。

また、可能表現で表される動作の主体が、「～には」や、それに準ずる「～にとって」の形で示されることがあるが、この場合も、主体を表す名詞が連体修飾を伴い、「条件づけ」を表す<sup>6)</sup>。

- (14) 私が厄介なものを買ったことに気がついたのは、兵藤家の黒板塀に沿ってあるいていたときである。私は立ち止まった。胡弓は、ふるさとを想うことすら禁じられている兵藤家には、とてももちこめない品物であった。(三浦哲郎『驢馬』)
- (15) マンションに入る前と今とでは、世界は七瀬にとってまったく違ったものになっていた。頼央の心の中に次つぎと浮かぶ巨大な、奇怪な、荘厳なイメージをなまなましく感じ取ることできた七瀬にとって、頼央が偉大な嘘を、とてつ

もなく大がかりな嘘をついたに違いないと考えて気をまぎらせることはとてもできなかった。(筒井康隆『エディプスの恋人』)

### ③前文に示されている場合

「条件づけ」が前文に示されていることもある。この場合、同一文中でなくても、「条件づけ」となるものが、文として明示されているという点で、後述する、コンテキスト上に示される場合とは区別される。

- (16) 「いや、こんなものは杜撰なものだよ。とても信用できない。あとあとに問題が残るからねえ。なに君、ほくの言うとおりにすれば訳はない。ほくはねえ、こういうことにかけては専門家だよ。ほくの言うとおりにやってくれたまえ」(北杜夫『楡家の人びと』)
- (17) 影は首を振った。「ひっぱりあげてもらってもそのあとが駄目だ。俺はもう走れない。とても脱出口までは行きつけそうもないよ。どうやらもうおしまいらしいね」(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)
- (18) 加藤は時計を見た。四時半に近かった。とても北鎌尾根に引きかえすことはできないし、それよりもなによりも恐ろしいのは、夜の到来であった。(新田次郎『孤高の人』)

#### 4. 1. 2. 「条件づけ」がコンテキスト上に示されている場合

「条件づけ」は、構文的に明示されることもあれば、コンテキスト上に示されており、構文的には具体的に示されていないことがある。しかし、この場合も、「条件づけ」があることには変わりなく、実現が不可能となる理由や状況などは、コンテキストから読み取ることができる<sup>7)</sup>。例(19)では、コンテキスト上に描写されている、落ち着かない様子から、「早く東京に行きたくて」のような内容が、例(20)では、まとまりのない話し方から、「あたしの今の状態では」のような内容が「条件づけ」として読み取れる。

- (19) 鮎太は三人の友達からの手紙を読み終った時、よし、今から直ぐ東京へ出掛けて行くぞと思った。まだ見たこともない東京の佐分利邸を想像し、そこでウイスキーを御馳走になっている三人の仲間の姿を眼に浮かべると、もうじっとしてはいられなかった。夏休暇などとても待ってられなかった。(井上靖『あすなる物語』)
- (20) 「(前略)先生にもあたくしの病気をもっとよくわかって頂きたいのですが、一



体こうへんなふうに胸がどきどきする、頭がこうお盆でもかぶらせられたように……ああ駄目ですわ、とても説明もできませんし、先生にはわかりっこありませんわ……」(北杜夫『楡家の人びと』)

否定用法では、このように、「条件づけ」が何らかの形で表されているのだが、特に会話文において、「条件づけ」に相当する内容が具体的に示されない、例(21)のような例が見られる。しかし、この場合も、「とても」の使用から、一般的な知識や常識をもとに、聞き手は何らかの「条件づけ」があることを読み取ることができる。例(21)では、「みっともなくて」、「恥ずかしくて」などの理由があることが読み取れる。このため、聞き手は点線のような反応を示すのである。

- (21) 「夫は何て?」「人前にはとても出せない女房だって」思わずムツとした。けれども、男は女が理解に苦しむ言動をする生き物だ。妻を褒めるということがどうしてもできないタイプもいるだろう。(唯川恵『肩ごしの恋人』)

このように、否定用法の「とても」には、実現が不可能となる理由や状況を提示する「条件づけ」が現れる。肯定用法の「とても」の場合、この「条件づけ」を必ずしも必要とはしない。例(22)や例(23)のように、肯定用法の「とても」は、その理由となるものが不明であることを示す「なんだか」や「なぜか」とも共起することができる。

- (22) 洗濯とか炊事とか、そういうことを母親に代って彼女がみんなやっているの、それでアカギレができていられるのかもしれないな、と思った。その考えはほぼ間違いないことのように思えた。そして、いまどきアカギレのある女性というのは、なんだかとてもいいな、と思った。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)

- (23) 私とおばとはあまり親交がなく、親類全体の大きな集まりでもない限りは顔を合わせることも滅多になかった。でも私は変わり者のおばをなぜかとても好きだったし、彼女と私だけが共有する、ある小さな思い出を持っていた。(吉本ばなな『哀しい予感』)

こういった例は否定用法の「とても」には見られない。「とても」を用いるには、(24')のように、不可能となる理由や状況を提示する必要があるからであろう。

- (24) ? なんだかとても家に帰れない。(作例)

- (24') 仕事がまだ残っていて、とても家に帰れない。(作例)

このように、否定用法の「とても」が用いられる文では、実現が不可能となることの「条件づけ」、つまり、何かしらの理由や状況というものが提示される。

#### 4.2. 語彙的否定形式と共起する場合（否定用法／肯定用法）

「とても」は、工藤（1999、2000）でも指摘されているように、「不可能だ、無理だ、駄目だ」のような「不可能」を表す語と、「シかねる、シがたい、シにくい、シづらい、難しい」のような「困難」を表す語と共起すると、文法的否定形式と共起する場合と同様の働きをし、否定用法となる。この場合においても、「条件づけ」が見れる。

- (25) 宮村はそういつて、雪の穴から立上った。一昼夜の間に宮村はすっかり弱っていて、とてもこの風では無理だし、時間的にも不可能に考えられた。(新田次郎『孤高の人』)
- (26) 「なぜ僕をそういう風に疑るのかなあ。……まあ、正直に言って、僕は伯父さんにはずいぶんお世話になっているんですよ。その伯父さんの娘さんと結婚しようというのに、その人を裏切るようなことが、できると思う？ ……人間というのはね、何よりも大事なものは信義ということですよ。誠実さということですよ。それが人間関係の根本じゃないかねえ。僕の誠実さが疑われるということは、端的に言って、僕自身が否定されるということだな。そうでしょう。……それでは結婚なんて、とても駄目だな」(石川達三『青春の蹉跎』)
- (27) 「それは公平じゃありませんな、奥さん」と、事務長はもじもじと言った。「奥さんの病院が丸焼けに……（ここで事務長は目に見えて逡巡した）なったとしたら、とても私は壁掛を頂きかねますからね」(北杜夫『楡家の人びと』)

しかし、これら「不可能」や「困難」を表す語の中でも、「難しい」と共起している「とても」は、肯定用法として働く場合がある。例(28)と例(29)の「とても」は肯定用法である。

- (28) あらたまった信夫の声に、ふじ子は不審そうに澄んだ目を向けた。その目をみると、信夫はやはり言い出しかねた。何と言ったら、一番驚かさずにすむだろうか、悲しませずにすむだろうか、信夫は言葉をさがしていた。「どうなすつたの。ずいぶんむずかしいお顔をしてくるわ」「ええ、とてもむずかしいことなんです」信夫は少し笑った。自分が札幌を去っても、ふじ子はここにこうして、ただ寝ているより仕方がないのだと思うと、ただちに転勤を告げることはできなかった。(三浦綾子『塩狩峠』)

- (29) 「ええ、一カ月かそこら。私は昔、心臓の弁に問題があつて、それを手術でなおさなくちゃならなかったの。とてもむずかしい手術だつていうことで、家族のみんなは私のことを半ばあきらめていたくらいなの。でも不思議ね。結局私だけが生き残つて健康そのもので、他の人はみんな死んじやったわ」(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

「難しい」と共起している「とても」が、否定用法として用いられているか肯定用法として用いられているかは、「条件づけ」の有無によって区別される。否定用法として用いられる「とても」には、「条件づけ」が現れるからである<sup>8)</sup>。次に見られる例は、陳述副詞としてのみ用いられる「とうてい」には言いかえられるが、程度のはなはだしさを表す程度副詞である「非常に」には言いかえにくい。

- (30) しかし一般廃棄物の増加現象は、この三つだけでは、とても減少への転換は難しいことを教えている。何が欠けているのか。(『CD-毎日新聞2001』2001/11/01社説)
- (31) だが、日本の場合、それ以上に問題なのは、休暇の取り方だ。特定のシーズンに集中して取らざるを得ない現状では、とても欧米並みの「ゆとり」を味わうのは難しい。1週間以上の連続休暇を好きな時期に取る労働慣行の定着が先決になる。(『CD-毎日新聞1996』1996/07/20社説)

これに対し、例(32)のような、「難しい」と共起し肯定用法として用いられている「とても」の場合、「条件づけ」は現れない。また、工藤(1983)でも指摘されているように、程度副詞として用いられている肯定用法の「とても」の場合、修飾している語の直前に位置する。次の例は、「とうてい」には言いかえられないが、「非常に」には言いかえることが可能である。

- (32) 「ええ、一カ月かそこら。私は昔、心臓の弁に問題があつて、それを手術でなおさなくちゃならなかったの。とてもむずかしい手術だつていうことで、家族のみんなは私のことを半ばあきらめていたくらいなの。でも不思議ね。結局私だけが生き残つて健康そのもので、他の人はみんな死んじやったわ」(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

「難しい」と共起している否定用法の「とても」においても、修飾している語の直前に位置することがあるが、「条件づけ」が現われているという点で、肯定用法の「とても」

とは区別される。しかし、この場合、「とうてい」だけではなく、「非常に」と言いかえてもよいことから、陳述的な側面を持ちつつ、程度副詞としての側面も持っており、二面的になっていることが考えられる。

- (33) 生活保護の受給世帯が増えている一番の責任は、「構造改革」の名のもとに社会の弱肉強食の度合いを公然と進めてきた政治にある。上位2割の高額所得者が下位2割の人の168倍（再分配前の当初所得）もの所得を得ているという。こんな格差社会では、ひとたび貧困に陥ったら自力で生活を立て直すのはとても難しい。（『CD—毎日新聞2006』2006/03/27総合面）
- (34) 当時の担当者は「今回の不祥事と同様、番組制作で子会社に支払われたコストが高いのかどうか判断できなかった」と明かす。ある検査院幹部は「例えば、このソファを誰から購入したかは領収書からチェックできるが、ソファのような現実のものが存在していないと、購入の当否を判断するのはとても難しい」と話す。検査院内で、NHKは防衛庁、郵政公社と並んで「検査に非協力的」とささやかれているという。（『CD—毎日新聞2004』2004/12/28総合面）

このように、「難しい」の場合、「とても」が否定用法であるか肯定用法であるかは、「条件づけ」の有無と構文的位置によって区別される。「とても」と共起し、どちらの用法としても用いられる「難しい」の場合、構文的特徴に見られる性格から、「とても」の否定用法と肯定用法の間に存在するものとして位置づけられる。

#### 4.3. 文法的肯定形式と共起する場合（肯定用法）

4.2で示した語彙的否定形式以外の文法的肯定形式の述語と共起する「とても」を肯定用法とする。この場合、形容詞述語との共起が典型的であり、程度のはなはだしさを表す程度副詞として用いられる。

肯定用法の場合、「条件づけ」が必ずしも現れなくてよい。例(35)のように、述語で表される状態の生じた理由といったものが構文的に現れることもあるが、否定用法の「とても」とは違って、例(36)、例(37)のように、構文的あるいはコンテキスト上に現れていなくても、「とても」を用いることが可能である。実際の例を見てみると、「条件づけ」が明示されていない例が「とても」の肯定用法の8割以上を占めている。また、肯定用法の「とても」の場合、構文的には修飾する語の直前に置かれることが特徴的である。

- (35) 私はもう一度刷りたての朝刊のことを考えた。指にインクのあとがついてしま

いそうなほど新しい朝刊だ。中に折り込みの広告が入っていて、とてもぶ厚い。  
(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

(36) 僕はバケツに覆いかぶさる恰好で洗い場へ手をついて、犬がするように顔を突込んで甘露甘露とばかりに、気がすむまで飲んだ。飲み初めを三度に区切って飲むべきことも忘れていた。ただ飲んだ。とてもうまかった。(井伏鱒二『黒い雨』)

(37) その時見た月が、とても大きな、白く輝く満月だったことをきゆうに思い出して、私は空を見上げた。(湯本香樹美『ポプラの秋』)

## 5. 史的考察から見る「条件づけ」

「とても」の否定用法に見られる「条件づけ」は、史的考察からも確認できる。現代日本語における「とても」は、否定述語とも肯定述語とも共起し、その極性によって異なる意味・機能を持つ副詞であるが、今に見られる肯定用法の「とても」が現れたのは、大正10年(1921年)ごろであるとされている<sup>9)</sup>。

肯定用法が発生した過程については、いくつかの見解があるようであるが、そのうち、松井(1977)などでは、「不可能」や「困難」を表す「駄目だ」、「難しい」といった語彙的否定形式との共起が媒介となっているのではないかとしている<sup>10)</sup>。これらは、意味的には、「不可能」や「困難」を表す語であるため、この場合の「とても」は「とうてい」の意味で用いられていながらも、形の上では肯定であることから、程度を強調する意味を持つものとしても考えられるようになったという見解である。

実際に、明治期からの例をみると、やはり、否定用法の「とても」が先行しており、肯定用法の「とても」は、「不可能」や「困難」を表す語彙的否定形式との共起が見られた後に、現れている。「とても」が共起する述語の極性による用例分布を年代別に表すと、次の〔表1〕のようになる。

〔表1. 「とても」が共起する述語の極性による用例分布(年代別)<sup>11)</sup>〕

年代	極性 文法的 否定形式	文法的肯定形式	
		語彙的否定形式 (不可能・困難)	語彙的否定形式以外
1890～	36 (97.3%)	1 ( 2.7%)	0 (0%)
1900～	213 (95.1%)	11 ( 4.9%)	0 ( 0%)
1910～	118 (86.1%)	18 (13.2%)	1 ( 0.7%)
1920～	71 (76.3%)	9 ( 9.7%)	13 (14.0%)

[表1]からもわかるように、「不可能」や「困難」を表す語彙的否定形式以外の文法的肯定形式と共起する「とても」がある程度まとまった形で現れるのは、1920年代以降である。これは、従来の研究でも指摘されている、大正10年（1921年）ごろであるという指摘と一致する結果である。

明治期の例を具体的に見ていくと、文法的否定形式と共起し否定用法として用いられている「とても」には、やはり、「条件づけ」が見られる。（明治期の例については、年代順に掲載する。以下同様である。）

- (38) (前略)、清兵は怯懦ではあるが、我兵は到底一騎撃の戦をしたら協はない、捕虜にするにも、とても一人と一人との組打では、我兵は清兵の腕を捻る事も出来ぬ。（『太陽』1895年1号）
- (39) 村へ出て見ると、一軒として大騒を遣っておらぬ家は無く、鎮火と聞いて孰も胸を安めたようなものの、こう毎晩の様に火事があっては、とても安閑として生活していらぬというそわそわした不安の情が村一体に満ち渡って、家々の角には、婦やら、老人やらが、寄って、集って、いろいろ喧しく語り合っている。（田山花袋（1902）『重右衛門の最後』）
- (40) 老人は呼吸を計って首をあげながら「私ももとはこちらに屋敷も在って、永らく御膝元でくらししたのですが、瓦解の折にあちらへ参ってから頓と出てこんのでな。今来て見るとまるで方角も分らん位で、——迷亭にでも伴れてあるいてもらわんと、とても用達も出来ません。滄桑の変とは申しながら、御入国以来三百年も、あの通り將軍家の……」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て（後略）（夏目漱石（1905）『吾輩は猫である』）

また、その後に続く、「不可能」や「困難」を表す語彙的否定形式と共起する「とても」も、「条件づけ」を伴い、否定用法として用いられている。

- (41) か又は党派の関係で無才無能の者出て議員又は官吏となり、有才有能の者は下に隠れて仕舞ふと云ふ有様ではとても駄目です。（『太陽』1901年12号）
- (42) 政府の新事業としては、海軍第三期擴張は、必要ではあるが、三十五年度には<sup>12)</sup>、とてもそれを豫算に編んで、餘裕のない財政で、遣り通ほすことは、六づかしからう。（『太陽』1901年10号）
- (43) 「それで御座んすね。あの様子じゃ、とても駄目で御座いましょうか」（夏目漱石（1907）『野分』）

次のような例が1例見られたが、この例の場合、語彙的否定形式と共起している他の例とは違って、「非常に」に言い換えることが可能である。このような、述語の直前に位置している「とても」が、肯定用法の「とても」の発生を促したことが考えられる。

- (44) 今の如く骨に入りたる大腐敗を治療せんとするに、此の如き勢力なき少数の人にてはとても六ヶしい事と思ひます。(『太陽』1901年12号)

その後、1920年代ごろから見られる、肯定用法の「とても」は、「条件づけ」を必ずしも伴っているわけではない。

- (45) 彼等の健康ですか？とても丈夫なものです。病気になる者などありません。(『太陽』1925年11号)
- (46) 横井禮市は頭のわるい性か、この作品も見劣りがするやうで、『室内静物』などはとても閉口である。安井曾太郎彼は日本のロマンで、『裸女』など噂するほど悪いものであつた。(『太陽』1925年12号)

また、「とても」の類義形式として、従来、「とても」の強調体として扱われてきた「とつても」を挙げることができるが、「とつても」の場合、次の例に見られるように、文法的肯定形式の例とのみ共起する。

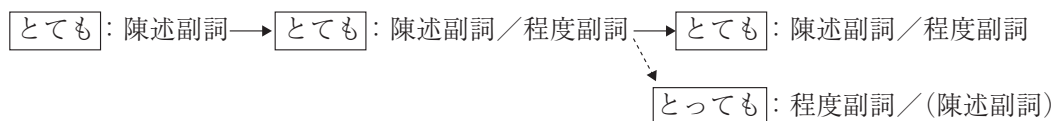
- (47) 「(前略)二人とも、とつても楽しかった。勉強したり、働いたりして、彼は声をたてて笑うようになった位なの」(曾野綾子『太郎物語』)
- (48) 「こいつ、とつても面白いんだ。俺がいたずらを叱ったりするじゃない。そうすると、泣くかわりに、すぐお世辞笑いをするんだ」(沢木耕太郎『一瞬の夏』)

「とつても」は、今回収集した例では、1952年の作品から見られ始めるが<sup>13)</sup>、話しことばに限られ、女性ことばに多く見られることが特徴的である<sup>14)</sup>。

- (49) 「べつのおなご先生が、すぐきますからね、みな、よく勉強してね。先生、とても岬をすきなんだけど、この足じゃあしかたがないでしょ。また、よくなったら、くるわね。」(壺井栄『二十四の瞳』)

「とつても」の場合、実際に、口語では、「とつてもできない」などといったような形で用いることが可能であるかもしれない<sup>15)</sup>。しかし、その量的分布から考えると、「とても」の単なる強調体と見るよりは、もっぱら程度副詞として機能していると言える。「とても」との機能分化が生じているのかもしれない。今後「とつても」に否定用法が定着してくる

のかどうか興味深いところである。



## 6. おわりに

本稿では、否定用法の「とても」に見られる「条件づけ」を中心に、「とても」の構文的特徴について分析を試みた<sup>16)</sup>。「条件づけ」の有無と、共起する述語の極性の観点から、それぞれの用法における「とても」が用いられる文の構文的特徴を整理すると、[表2]のようになる。

[表2. 「とても」の構文的特徴と用法]

「とても」と共起する述語の形式		「条件づけ」の有無	構文的位置	用法
動詞述語 <sup>17)</sup> (可能表現)	文法的否定形式	○	述語の直前でなくても可	否定用法
形容詞述語	語彙的否定形式 (「不可能」・「困難」系)	○		
	文法的肯定形式	△	述語の直前	肯定用法
	語彙的否定形式以外	△		

本稿の内容をまとめると次のようになる。

- ①「とても」が文法的否定形式と共起し、否定用法として用いられる場合には、今回分析した限り、実現が不可能となる理由や状況を提示する「条件づけ」が必要不可欠であると考えられる。「条件づけ」は、構文的に明示されることもあれば、コンテキスト上に示されていることもある。「とても」の構文的位置は、述語の直前でなくてもよい。
- ②肯定用法として用いられる「とても」の場合、「条件づけ」は任意である。实例を見る限り、条件づけを伴っている例は少なく、今回収集した肯定用法の例では、全体の2割にも及ばない。「とても」の構文的位置は、述語の直前である。
- ③「とても」が「不可能」や「困難」を意味する語彙的否定形式と共起すると、文法的否



定形式の場合と同様に、否定用法となる。語彙的否定形式の中には、「難しい」のように、否定用法とも肯定用法ともとれるものが存在し、この場合、「条件づけ」の有無と「とても」の構文的位置によって、否定用法か肯定用法かが区別される。「条件づけ」が現れている場合、否定用法となるが、「とても」の位置が述語の直前である場合には、肯定用法としての側面も持つようになり、二面的である。

- ④現代日本語に見られる「とても」の肯定用法が現れたのは大正10年（1921年）ごろであると推定されているが、それまでの過程を見ると、「条件づけ」を伴った「不可能」や「困難」を表す語彙的否定形式と共起する例が先行している。文法的否定形式と共起する否定用法の「とても」はさらに前から見られ、「条件づけ」も伴っている。また、従来、「とても」の強調体とされている「とっても」は、もっぱら程度副詞として機能しており、「とても」に肯定用法が定着し始めた時期から見られるようになる。

本稿では、「とても」の否定用法を中心に、「とても」が用いられる文の構文的特徴を考察してきた。「とても」の否定用法に見られる「条件づけ」という構文的特徴を中心に、2つの用法間に見られる構文的な相違点について分析を試みたが、なぜ、否定用法の「とても」に「条件づけ」が現れるのかについては、十分に考察が行き届いていない。1つの説明の可能性としては、次のようなことが考えられる。

「とても」を用いない「昨日は眠れなかった」だけでも、原因・理由がどうであれ、「意図したことの非実現」を表すことができる。わざわざ「とても」を用い、「昨日はとても眠れなかった」とすることと、その原因・理由を明示するということは連動しているのかもしれない。原因・理由を明示しつつ、そのために、意図したことが実現できないということを聞き手に伝えるのが「とても」の役割であることが考えられる。次の例に見られるように、相手の誘いや依頼を断る際に、「とても」を用いるとより丁寧な断り方に聞こえるのは、不可能ではあるが、実現の意向はあり、理由があつての不可能であることを伝えるからだと思われる。精密な分析は今後の課題である。

A：開会スピーチをお願いしてもいいですか？

B：いや、私にはとてもできません。

また、程度副詞は、工藤（1983）でも指摘されているように、評価性に重点をおいて捉えることも、程度性に重点をおいて捉えることも可能な、2つの側面を持った副詞である。本稿では、構文的特徴から「とても」を考察してきたが、程度性や評価性という観点からの考察も有効であると思われる。今後、このような点も視野に入れ、考察を深めていきたい。

## 注

1) 森下 (2001) では、金子 (1980) に従い、次のようなものを典型的な可能表現としている。以下、金子 (1980) に従ったとする、森下 (2001) の典型的な可能表現に関する記述を抜粋する。

## (1) 第一形式

①「もととなる動詞の語幹」に「可能の接辞+語尾-ru」をくみあわせたタイプ

②特殊変化動詞“する”をアト要素とする動詞から“する”をとりはずし、のこったマエ要素に、文法的な補充のてづきによってアト要素として可能をあらわす“-できる”をくみあわせたタイプ

## (2) 第二形式

「可能」をシタクティカルにあらわす手段「普通体動詞のすぎさらずの肯定形+koto-ga dekiru」

## (3) 第三形式

「動詞の“単語づくりの要素(例.yomi-)”に“-うる/-える”をくみあわせることによってえられる“あわせ動詞”]

2) 作品の出典の詳細については、末尾の「用例出典」を参照されたい。

3) 「とても」が修飾する語は、「とてもうれしい出来事」のように規定語である場合も存在するが、本稿では、先行研究での記述を踏まえ、ひとまず「とても」が共起する述語という用語を用いることとする。

4) 否定形式の定義については、基本的に、工藤 (2000) での定義に従う。工藤 (2000) での定義を、下の表にまとめる。

文法的否定形式	語彙的否定形式
主語と述語とのむすびつきを否定する<文否定>	主語と述語とのむすびつきは肯定的でありながら、単一概念を否定する<語否定>
陳述副詞と呼応	陳述副詞とは基本的に呼応せず、程度副詞と共起
肯定とは矛盾関係	肯定とは反対関係
包括的；動詞、形容詞、名詞述語に規則的に存在する。	非包括的；対応する肯定形式が存在する場合もあれば、ない場合もある。

5) 文法的否定形式の述語でなくても、「とても」が否定用法として用いられる場合があるが、これについては4.2節で詳しく述べる。

6) 次の例に見られるように、連体修飾を伴わない場合もあるが、一人称主体に限られる。しかし、この場合においても、構文的に直接明示はされていないものの、コンテキスト上、話し手には動作を実現する能力が備わっていないことが読み取れる。

・「もちろん、それもある。付け加えれば、女はいつも自分を被害者だと思っている。僕にはとても理解できない」(唯川恵『肩ごしの恋人』)

・「いや、火事のあとでも基一郎先生はねえ、なんの苦もない顔をなさっておりましたよ。借金の証文を破いてしまわれたのを知っているかね？ 借金取りの前でねえ、その証文を、これはなにかの間違いでしょとおっしゃったかと思うと、平気の平左でびりびりと引裂いてしまわれたんだ。ああいう真似は君、われわれにととても出来ることじゃあない」(北杜夫『楡家の人びと』)

7) 「とても」が、「思われない(思えない)、考えられない、信じられない」のような思考活動を表す動詞や「言えない」のような言語活動を表す動詞の否定形式と共起し、陳述副詞として働いている場合が多く見られる。これらの場合、「～とは」の形の引用節が必ず先行していることが特徴的である。「条件づけ」は構文的に示されていないことの方が多い。思考活動や言語活動を表す動詞の場合、そのような思考活動

や言語活動が不可能となる理由や状況は、それまでのコンテキストから読み取れることが多く、構文的に明示する必要がないからではないかと思われる。精密な考察は今後の課題としたい。

・襟書房は、借金をのこして、都落ちをした。——私には、それがとても他人事だとは思われなかった。  
(三浦哲郎『帰郷』)

・私はその時、オサムくんと西岡さんの食事風景がとても感じがよかった、ということをお願いたくて、でも「キャンプみたい」と言うよりほかに、もっといい表現があるとはとても思えなかったのだ。  
(湯本香樹美『ポプラの秋』)

・「さ、着きました。どうぞ入って下さい」と男は言って私を先に入れ、それから自分も中に入って扉をロックした。「大変だったでしょう?」「そんなことはないとはとても言えないですね」と私は控えめに言った。(村上春樹『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』)

8) 今回の用例の収集対象となった小説からは「難しい」の例が少なかったため、「難しい」に関しては、1991年から2006年までの『CD-毎日新聞』に収録されている記事から用例を補っている。

9) 史的観点から「とても」を考察したものには、新村(1940)、松井(1977)、涌井(1988)、播磨(1993)、吉井(1993)、中尾(2005)などを挙げることができる。これらの研究では、今に見られる「とても」の肯定用法が生じた時期について、坪内逍遙と芥川龍之介が、それぞれ、1923年と1924年に、次のようなことを述べていることから、大正10年(1921年)ごろであると推定している。

・序でにいふが、近頃は「とても」といふ訛語が非常に廣く使用される。いふまでもなく「とても」は「とても」「かくても」の約つて出来た俗語だから、標準語(東京語)ではいつも打消し言葉で結ぶのが例だ、それだのに近頃は「とても面白い」「とても有力だ」「とてもよく行はれる」などと連用する、中には「到底も」とルビまで附けて書く者もある、或は「食はず嫌ひ」と混同してか「負けざらひ」と云うべきを「負けずざらひ」と書いたり言つたりする云々(坪内逍遙(1923)「所謂漢字節減案の分析的批評」)

・「とても安い」とか「とても寒い」とか云ふ「とても」の東京の言葉になり出したのは数年前のことである。勿論「とても」と云ふ言葉は東京にも全然なかつた譯ではない。が、従来の用法は、「とてもかなはない」とか「とても纏まらない」とか云ふやうに必否定を伴つてゐる。肯定に伴ふ新流行の「とても」は三河の國あたりの方言であらう。現に三河の國の人のこの「とても」を用ゐた例は元禄4年に上梓された「猿蓑」の中に残つてゐる。(芥川龍之介(1924)「澄江堂雜記」)

10) このほかに、肯定用法の発生過程については、新村(1940)が、一種の省略法からきたものではないかという意見を提示している。新村(1940)は、「面白くてとても耐えきれない」の逆転省略、「とても耐えきれない程面白い」の中略、または、「とても面白くて耐えきれない」の下略といった、省略の過程から、肯定形式との共起が生じたという見解を述べている。

11) 用例収集の対象のうち、『太陽コーパス』は、1895年から1928年まで刊行された雑誌『太陽』を資料化したものであるため、[表1]では、他の用例収集対象についてもこれに合わせ、1930年までの用例数を示している。年代によって収集した作品の数に偏りがあるため、各形式の占める比率を年代ごとに算出し、括弧内に示しておく。『太陽コーパス』以外のデータに見られる、1930年代以降の用例分布は、下表のとおりである。1930年代以降は、語彙の否定形式以外の文法的肯定形式と共起している例が数多く見られ、全体に占める比率も高い。

[[とても] が共起する述語の極性による用例分布：1930年代以降]

年代	極性 文法的否定形式	文法的肯定形式	
		語彙的否定形式 (不可能・困難)	語彙的否定形式以外
1930～	43 (70.5%)	0 (0%)	18 (29.5%)
1940～	5 (45.4%)	1 (9.2%)	5 (45.4%)
1950～	14 (31.1%)	1 (2.2%)	30 (66.7%)
1960～	95 (68.3%)	10 (7.2%)	34 (24.5%)
1970～	56 (60.2%)	2 (2.2%)	35 (37.6%)
1980～	42 (19.1%)	5 (2.3%)	173 (78.6%)
1990～	6 (26.1%)	0 (0%)	17 (73.9%)
2000～	8 (61.5%)	0 (0%)	5 (38.5%)

12) ここでは文の内容から、「財政の余裕のない三十五年度には」のような意と解釈される。

13) 『日本国語大辞典 第二版』の「とっても」の項の記述を見ると、程度副詞として用いられている「とっても」の例として、太宰治 (1939) の『女生徒』から次のような例を挙げている。しかし、いずれにしても、「とても」のように用いられる「とっても」が見られるのは、「とても」の肯定用法が発生し、使用頻度が増えた時期であると考えられる。

・「眼鏡をはづして、そっと笑ってみる。眼が、とってもいい。青く青く、澄んでゐる。」

14) 「とても」のこのような特徴は、「とても」には見られない。「とても」の場合、地の文にも用いられ、男性ことばにも多く見られる。ただ、「とても」には、テキストタイプによって、共起する述語の極性に偏りがあり、地の文では文法的否定形式と共起しやすく、会話文では文法的肯定形式と共起しやすいという傾向が見られる。このような、会話文での「とても」は文法的肯定形式と共起しやすいという傾向が、会話文でもっぱら程度副詞として用いられる「とっても」の特徴に関係していることも考えられる。今後、このような点についても考察を深めていきたい。

15) 「とてもできない」といった例は、今回収集した用例の中には見られなかったが、次のように、「不可能」を表す「無理だ」と共起している例は1例見られた。

・「ええ、どうぞ。頭がおかしくなりそうでしたの。何が何だか分からなくて。とっても私には無理ですわ」(赤川次郎『女社長に乾杯!』)

16) 「とても」の否定用法に見られる「条件づけ」は、意味的な側面からの分類も可能であると思われる。「条件づけ」は、意味的な側面から、大きく、内的要因によるものと外的要因によるものとに2分類することができる。つまり、実現が不可能となる理由や状況は、主体の心理や能力などによる内的要因であることもあれば、主体をとりまく外的状況が要因となっていることもある。まだ暫定的ではあるが、現時点における「条件づけ」の意味的な分類を以下に示す。精密な考察は今後の課題としたい。

[意味的な側面から見た「条件づけ」]

a) 内的要因

a-1) 心理

例) 「そりゃあなた、もう半狂乱でしたよ。捜査が打ち切られてからもひとりで山の中を歩きまわったり、近くの村や町を尋ねまわったりね。眼を血走らせて、なりふり構わず奥さんの行方を探し求める姿には鬼気迫るものがあった。気の毒で、わたしはとても見ていただけませんでした

よ。(後略)」(筒井康隆『エディプスの恋人』)

a-2) 能力

例) 「マンスリーサーバイ」はB5判横組みの雑誌である。内容はデパートやスーパーの経営分析やそこで販売している商品の売行動向、その市場についての考察、というようなものが中心になっていた。経営分析などというのは非常に難しいし、ある程度企業のバランスシートなどを読みとる能力がなければとてもたちうちできなかった。(椎名誠『新橋烏森口青春篇』)(例(6)再掲)

b) 外的要因

例) 犬を連れて散歩できるという催しも、子供らに列をすっかり占領されていて、とても割り込めそうにない。(唯川恵『肩ごしの恋人』)(例(4)再掲)

17) ここでは典型的な述語のみを挙げている。括弧内の「可能表現」と下段の「形容詞述語」についても同様である。

### 用例出典

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』新潮社／『CD-ROM版 新潮文庫 明治の文豪』新潮社／『CD-ROM版 新潮文庫 大正の文豪』新潮社／『太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』国立国語研究所／『CD—毎日新聞 1991～2006』毎日新聞社／江國香織(1991)『きらきらひかる』新潮文庫(1994)／辻仁成(1990)『ピアノシモ』集英社文庫(1992)／唯川恵(2001)『肩ごしの恋人』集英社文庫(2004)／湯本香樹美(1997)『ポプラの秋』新潮文庫(1997)／吉本ばなな(1988)『哀しい予感』角川文庫(1991)／吉本ばなな(1989)『TUGUMI』中公文庫(1992)

### 主要参考文献

- 金子尚一(1980)「可能表現の形式と意味(Ⅰ) —“ちからの可能”と“認識の可能”について—」『共立女子短期大学文科紀要』23 共立女子短期大学文科
- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 工藤真由美(1999)「現代日本語の文法的否定形式と語彙的否定形式」『現代日本語研究』6 大阪大学日本語学講座
- (2000)「否定の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店
- 新村出(1940)「とても補考」『日本の言葉』創元社
- 鈴木重幸(1972)『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 中尾比早子(2005)「副詞「とても」について—陳述副詞から程度副詞への変遷—」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集(国立国語研究所報告122)』博文館新社
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編(2001)『日本国語大辞典 第二版』小学館
- 播磨桂子(1993)「「とても」「全然」などにみられる副詞の用法変遷の一類型」『語文研究』75 九州大学国語国文学会
- 松井栄一(1977)「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だしさを表す場合—」松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院
- 森下訓子(2001)「「とても」の否定用法」『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』創刊号 同志社女子

大学大学院文学研究科

森田良行（1989）『基礎日本語辞典』角川書店

吉井健（1993）「国語副詞の史的研究—「とても」の語史—」『文林』27 松蔭女子学院大学国文学研究室

涌井澄子（1988）「程度副詞「とても」の研究—陳述副詞から程度副詞への用法の変化を中心に—」『上越教育大学国語研究』2 上越教育大学国語教育学会

#### 付記

本稿は、2008年度日本語学会秋季大会（岩手大学）で口頭発表したものに修正・加筆をしたものである。

（博士後期課程学生）

（2009年8月20日受付）

（2009年9月24日修正版受付）

（2009年10月2日掲載決定）